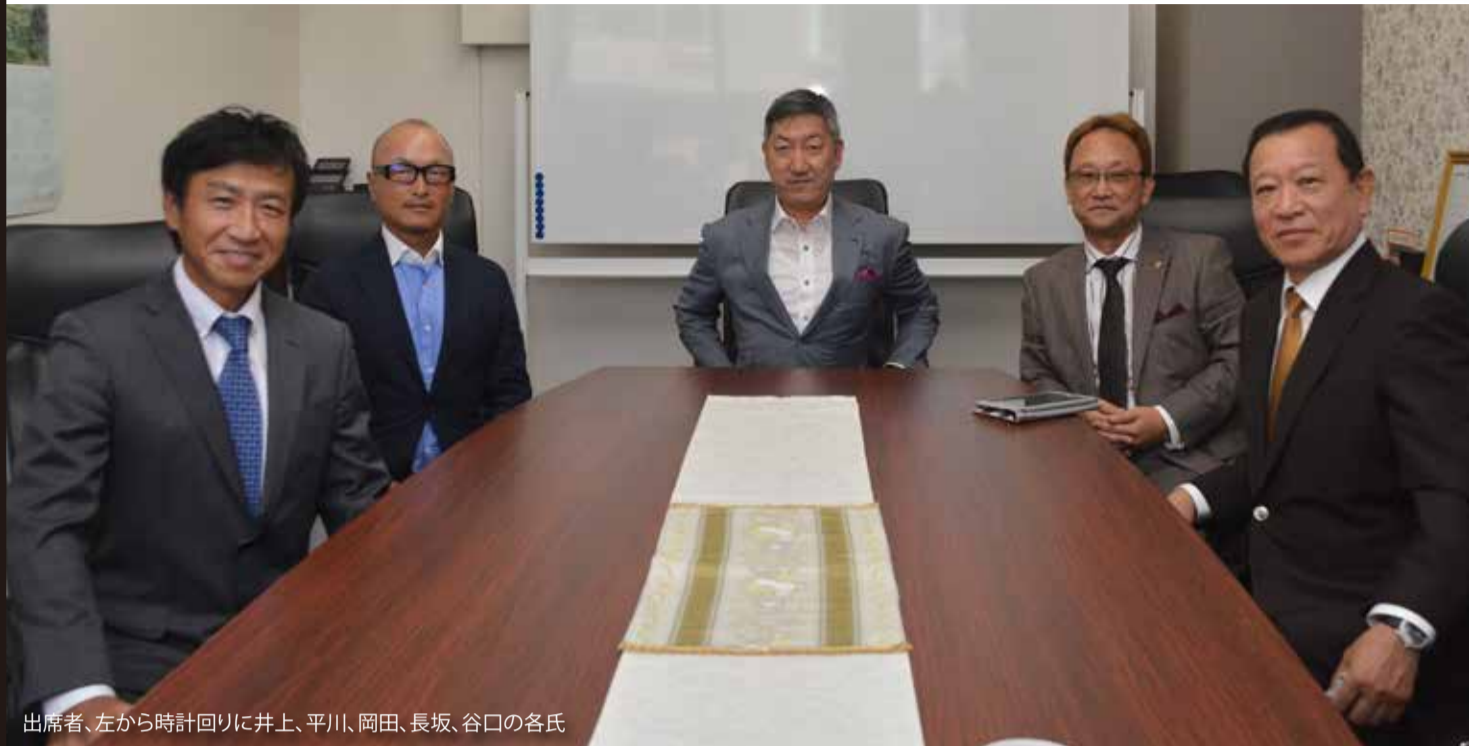


新規トーナメント・大岡産業レディースオープン誕生の舞台裏

「オール大阪でボウリングの活性化・底辺拡大の契機に」



出席者、左から時計回りに井上、平川、岡田、長坂、谷口の各氏

大阪・松原市に久々の新トーナメントが誕生することになった。大阪・中央区に本社を置く総合デベロッパーの株式会社大岡産業の協賛を得て『第1回大岡産業レディースオープントーナメント』が、10月26日から28日まで、ボウラー松原店で行われる。しかしただ単にトーナメントが1本増えるのとどまらず、ジュニア開発、ボウリング人口の底辺拡大を見据えた壮大なプランを描いている。大会誕生にかかわりのある5名の方にお集まりいただき、これまでの経緯や大会にかける思いなどをうかがった。

人の縁から動き始めた大阪発のプロジェクト

この発端は、昨年暮れの忘年会にさかのぼる。長坂、平川、井上の3氏は同じ近畿大学附属高校の同級生。岡田氏も、高校は別だが同級生だ。

「ボウリングは競技人口が縮小してきている。底辺を拡大するには、ジュニアの開発をしないといけないという思いがあります。ゴルフの活性化、とくに全国の中学・高校にゴルフ部をつくる活動をされている井上君に前々から、ボウリングにも力を貸してほしいという相談はしていました。ゴルフ連盟の活動をサポートしている岡田社長もその忘年会に出席していて、紹介してもらったのがきっかけでした」(長坂)

大岡産業は、井上氏が理事長

を務める日本高等学校・中学校ゴルフ連盟を特別賛助会員として支援する一方、元プロ野球選手をコーチに招いて野球塾を運営するなど、スポーツの振興に積極的に関わっている。

「私自身ボウリングは好きなんです。最近ではPリーグなど、見る方が中心になっていますが、機会があればボウリングも応援させてくださいという話をさせていただきました」(岡田)

「井上君と岡田社長のやり取りを聞いていて、エエっ本当ですかとなり、そこから話が一気に具体化していきました。とっかかりとして、いちばんアピールできるのはプロのトーナメントだろうということで、谷口会長に相談をさせていただきました」(長坂)

「長坂さんには、いいスポンサーがあったら紹介してください

いとかねがねお願いしていたので、非常にありがたいお話でした。打ち合わせをしていたのはまだ新型コロナウイルス騒動の前でしたし、前夜祭的なものは、ジュニアを中心に企画を考えてほしいという岡田社長の意向もありましたので、当初は子供たちが夏休みの7月末開催に決まったんですけどね…」(谷口)

初日にジュニア大会を組み込み、終了後には駐車場でパーベキューをというような計画も立てていたが、コロナ禍の影響でジュニアを巻き込んでというプランは、来年以降へ持ち越しとなった。

ボウリング人口増へクリアすべき課題

ボウラーの年齢構成比が高齢化していることはいうまでもない。若い世代にボウリング場に足を運んでもらうための動機づけには、何が必要だろうか。

「競技人口が増えるかどうかというのは、スター選手が出てくるかどうかというのが大きいと思います。そのスターが出てくるためにも、プロボウラーが活躍できる場、露出する舞台を少しでも増やすことが必要だと思います」(平川)

「あこがれや目標があれば、やってみたいという子は増えてくると思います。ゴルフの場合は、その目標がマスターズであったり、全米オープンなどで、オリンピックに出たいからといってゴルフを始める子はいない。ボウリングの場合はそれが何になるのか…」(井上)

「親御さんも夢を見るんですね。今の時代はテレビへの露出や、どれくらい収入があるのかというところに注目がいく。われわれ協会の役員としては、で



平川晴基氏

(平川商事株式会社代表取締役社長)

「私はボウリング場(ボウラー)を運営している立場ですが、ボウリングにはスポーツとレジャーの両面があって、どちらも大切です。そのなかでもスポーツとしての面がもう少し前面に出てくれば、父兄や学校にもアピールできるし、健全な形の育成がしやすくなると思います」



長坂貴久氏

(日本ボウラーズ連盟常任理事)

「スポーツボウリングはいいけれど、その前段階として、ボウリング人口、とくにピラミッドの土台の部分を広げなければいけないと思います。私はNBFで白石雅俊理事長の後ろ姿を見てきたので、白石さんの足元にも及ばないけど、業界がよくなるために、コーディネーター的な役割を担えればと思っています」



岡田タツヤ氏

(株式会社大岡産業代表取締役社長)

「現在はコロナ禍のなかで、例え無観客であっても選手同士のコンタクトがあるような競技は難しい。その点ゴルフやボウリングは、ある程度ソーシャルディスタンスを取りながらできるスポーツなので、どんどん応援していきたい。ジュニアの育成にも非常に興味があるので、一生懸命やっていきたいと思っています」



井上尚彦氏

(一般社団法人日本高等学校・中学校ゴルフ連盟理事長)

「私はゴルフの普及に関わってきましたが、ゴルフをやろうと思えば、ゴルフ場への行き帰りを含めて1日仕事です。それに引き換えボウリングは、地域に密着したボウリング場があって、時間的にも1日は取れない。だからボウリングの方がハードルが低いし、大いに伸びしろがあるなと思います」



谷口 健氏

(公益社団法人日本プロボウリング協会会長)

「われわれもボウリングをやってみて面白かったからはまってしまっただけなんです。だからまずは間口を広げてボウリングに接してもらう、体験してもらうことが大事だなと思います。そのときに、魅力を伝えるようなフォローをしっかりとすれば、ボウラーを増やすことは可能だと思います」

きるだけプロボウラーが輝けるような状況を作っていくかといけません」(谷口)

「長く応援させてもらっているゴルフと比べても、ボウリングのプロが置かれている環境は厳しいものがあると思います。もう少しいい環境にできないものかというのが、今回の冠大会をやらせていただく理由でもあります」(岡田)

「ボウリングをやっているジュニアが100人いるとして、10年後には5パーセントぐらいしか残っていないと思います。それを継続してやってもらえるような環境を作りたい。そのためにクリアしなければいけない課題は多いし、業界全体で取り組むべき問題ですが、まずはこのプロジェクトを大阪発でスタートしようと思っています」(長坂)